



まちづくり ひろしま

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

第7号(平成25年9月15日)

読者数：447名(募集中)

メールアドレス：hirosima.idea.c@urban.jp

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

□巻頭言

広島のみちづくりに羅針盤は？

前日本都市計画学会副会長
松波龍一

街は誰がつくるか

広島市の戦災復興は、とてつもない営為であったと思う。20数年をかけた1,100ヘクタールにおよぶ土地区画整理事業によって、現在のデルタ市街地の根幹ができあがった。その後の基町地区再開発、段原地区再開発といずれも10～30年をかけた大規模な事業がつづき、まさに都市をまるごと作り変えるような仕事を営々と行ってきたのが広島である。このことは誇ってよいと思う。

しかしそのために、なんとなく都市は巨大な公共事業によって作られるものという感覚が身についてしまったのではないかと。それで、街づくりのビジョンなども、いきおい公共投資型あるいは役所への陳情型のビジョンになりがちで、ある種の出来上がり予想図にもとづいて、誰かが全体を一気に作り上げることを前提としたようなものが多い気がする。このところ、大規模な跡地開発にコミットすることが多かった。そこで考えさせられたことは、そういうことである。

北米の都市の地下街

と言いながら思い出すのは、北米のさる大都市のダウンタウンに世界最大といわれる地下街を訪ねたときのことである。

総延長30kmとも35kmともいわれる空調の整った地下街がくもの巣のように張り巡らされていて、2つの鉄道駅、7つの地下鉄駅につながっている。ホテルやショッピングモールだけでなく、銀行から大学、博物館、ホッケー場、はたまた教会までがこれにぶらさがっていて、たいの用が地下で足りてしまう。

マスタープランはない！

このすさまじいネットワークを作り上げた都市計画というのは、すごい。さぞかし緻密な議論にもとづいたマスタープランがあるのだろうと思って質問した。「将来計画があれば、見せてもらえませんか？」

そのとき、蝙蝠傘をステッキ代わりにしながら案内してくれた市の担当幹部の説明に、いたく感銘を受けた。「ほとんど民間が勝手にやっていることなので、全体計画というのはありません。この先どうなるかは神のみぞ知るといことです。市がやったのは、地下街の理念にもとづいて道路の地下占用許可の基準をつくったことだけです。それで20年ほど放っておいたら、こんなネットワークができました。」

あまりに強く感銘を受けたので、わたしの記憶はだいぶ誇張されているかもしれないが、ここで強調したいことは、以下の3点。

① このインフラをつくったのは民間事業である、②公共側は地下街の接続を誘導する仕組みを

つくっただけ、③20年間さまざまな主体の思惑やその時々状況にあわせて個々の事業が積み重なった結果、ネットワークが「できてしまった」。

マスタープランの新しい形

いまの時代にマスタープランに求められる内容は、戦災復興から高度成長期に必要とした「出上がり予想図」のようなものではないかもしれない。それならどんなものか、と聞かれてもむつかしいが、おそらくもっとも重要なのは理念の共有という役割であろう、とは言える。

どうも、都市計画の理念というのはあまり信用されていない。便利言葉を連ねただけの、身体感覚から遊離したようなものが多いせいでもある。きれいごととはそれとして、現実の社会はもっと複雑でどろどろしたものだ、と棚上げしてしまうのが賢いやりかただと思われているふしがある。

しかし、信頼に足る理念と、それを実現するための仕組みが構築されてはじめて、長年の風雪に耐えて実効性をもつ計画になるのではないか。なぜかという、都市を公共が一気につくる時代は終わったからである。

あまり賢くならないで初心にもどり、心に響くような、あるいはみんなの想像力をかきたてるような目標をさぐる努力をしよう。

こういう市民的なトレーニングがこれから求められると思う。そうでなければ、単に絵に描いた餅をまきちらすだけで無為に時代を経ていくことになる。その間、広島は街は羅針盤もないまま、さまざまな主体の思惑とその時々状況に翻弄されながら、混乱していくばかり・・・とならないとも限らない。

ひろしまのまちづくりの動き

○旧球場跡地、民間利用の貸し出しスタート！

広島市は9月から旧市民球場跡地を民間にも利用できるようにした。市の公園条例の貸し出し基準を緩和し、自治体等の公的な利用だけでなく、公共団体の後援または協賛等があれば、民間事業者にも原則無料で貸すことができる。

民間開放の第一弾として、9月6日から16日まで「広島オクトーバーフェスト」が開催された。広島日独協会等のイベント実行委員会による本場ドイツのビール祭りを模したものである。

第2弾、3弾とイベントが予定されており、旧市民球場跡地を中心とした賑わいが戻ってきそう。但し、市内の別地の賑わいがここに移っただけでは意味がない。外部からの来訪者が見込まれる企画が期待される。

当面、旧市民球場跡地の利用が正式に決まるまでの暫定的な処置のようだが、いろいろと市民が利用していく中で、旧球場跡地利用のあるべき姿が見えてくるような気がする。

広島オクトーバーフェストに参加して

「オクトーバーフェスト」は、ドイツ・ミュンヘンで毎年秋に開催されている世界最大のビール祭りで、最近では日本でも東京を始め、各地で類似のイベントが開催されている。今回は中四国初のドイツビールの祭典と銘打っている。

9月6日（金）15時、オープンセレモニーもなく開場し、待ちわびた市民約200名が入場する。

旧球場跡地の半分ぐらいしか利用されておらず、仮設テントの屋根も低く、予想していた会場のイメージより控えめだ。11日間の短期イベントであり、広島の都市規模から想定して、採算の取れる投資規模ということか。

ジョッキを片手にドイツの食や文化を楽しめるならよいが、ビアガーデンと同じなら意味はない。どうであろうか？仕事帰りの会社員達、若いカップル、家族連れ等、会場は人で溢れていた。帰り際、ほろ酔い気分ですとドームを見上げ、今の幸せを実感する。少なくとも電車通り側の仮囲いは早く撤去できないか。

(瀧口信二)



○「広島ピースタワー」(仮称)の計画を発表!

2011年に行われた被爆100年広島市中央公園アイデアコンペでも何案かピースタワーの提案がなされた。平和の丘や過去から未来へ歴史を継承するアイデア等もあった。今回、原爆ドームに隣接する絶好の立地を生かして、既存のオフィスビルを「広島ピースタワー」(仮称)に改修する計画を広島マツダが発表した。

ドームの東側に建つ12階建ての「広島マツダ大手町ビル」で、屋上に平和記念公園を見渡せる展望テラスを設けて、「平和の丘」と呼ぶ。

12階は「平和会議場」と名付けて、企業に貸し出すほか、空いているときは平和学習の場として無料で開放する。

1階は休憩所を設けるほか、物産館として地元の食品などを販売する。3～11階は貸事務所である。

特徴的なのは、ビルの東側に地上から屋上まで歩いて上がれる螺旋状のスロープを設けていることだ。ここでは太古から現在までの広島の変遷を写真パネルで紹介する。

今年12月に着工し、2015年夏のオープン予定。設計は三分一博志建築設計事務所が行っている。三分一氏は犬島アートプロジェクト「精錬所」の設計で2010年度の日本建築大賞(日本建築家協会)を受賞している。今回は、既存のビルを平和をコンセプトにした建築に再生させる広島ならではの新しい試みであり、どんな建築ができるか今から楽しみである。



位置図(中国新聞より転載)



完成予想図
(三分一博志建築設計事務所)

○報告 「広島市中央公園グランドデザイン提案」報告・検討会

「まちづくりひろしま(第5号)」で紹介した広島市中央公園グランドデザインの提案は、日本建築家協会広島地域会のワーキンググループが作成し、3月末に広島市に提出している。

この度、11月24日から開催される広島地域会主催の広島イベントに模型等を展示することが決定。事前に会員に提案内容を報告し、検討する場が設けられた。

9月9日、17時30分より約2時間、建築サロン(中区・オガワビル2階)で熱い議論が交わされたので紹介する。

ワーキンググループより、計画区域のDNA(歴史的経過)と提案のベースとなった広島市中央公園アイデアコンペ(2011年実施)の説明から始まり、本題のグランドデザインは、「ひろしましみんひろば」、「7つの提案」、「市民団体主導の管理運営」を主眼に説明がなされた。

以下、主な意見を抜粋する。

- ・日本には広場の成功例が少ないので、明確な方向づけが必要。例えば、国際都市としての広場、他都市のバックアップ機能を持つ防災拠点、広島DNAとしての仮設による広場等。
- ・広島オクトーバーフェストは大変賑わっていた。規制を緩めてフレキシブルに利用できるようにすれば、広場は成功する。要はソフトの問題である。
- ・周辺は建物が集中し、このエリアは貴重なオープンスペースだから、箱モノはやめて緑を広げる方がよい。基町高層アパートは残して屋上を開放すれば、原爆ドームを望める丘となる。
- ・しみんひろばのコンセプトが模型にまだ十分反映されていないので、工夫が必要。

その他にも、聖地論やパワースポット論等、幅広い議論がなされたが、ワーキンググループは今回の意見も踏まえながら、このエリアを考え続けて、よりよい提案に高めていくと締めくくる。



○広島復興の軌跡（第2回）・・・平和大通りの成り立ち

広島のまちを特徴づけている平和記念公園、平和大通り、河岸緑地等について、過去の文献等を参考にしながら分かりやすくシリーズで紹介する。

今回は平和記念公園とともに広島まちのシンボルである平和大通りを取り上げる。

1. 百メートル道路計画のスタート

百メートル道路は、東の鶴見町から西の福島町までの3,570mの幅員が100mあったことから、そう呼ばれた。

1946年の広島復興都市計画において、市内のほぼ中央部を東西に横断する百メートル道路計画が決定されるが、大幹線道路としてではなく、防災道路、特に緑地帯として計画された。全国の被災都市でも24本計画されたが、実現したのは名古屋市の2本と広島の1本だけである。1946年11月に小町（中区）付近から整地が始まり、1948年6月には小町・中島間の整地が進む。

2. 平和大橋、西平和大橋の建設

百メートル道路にかかる4本の橋のうち、平和記念公園へのアクセスとなる元安川と本川にかかる橋の欄干は日系米国人のイサム・ノグチが設計する。丹下健三の推挙による。欄干はコンクリート打ち放し仕上げで、元安川側は日の出「昇る太陽」を、本川側は日の入り「和船の舳先」を表現している。橋の名前は1951年11月に一般公募により、「平和大通り」と共に、元安川を「平和大橋」、本川を「西平和大橋」と命名される。両橋は1952年3月に開通する。



平和大橋「昇る太陽」

3. 百メートル道路論争

百メートル道路も順調に整備された訳ではない。なぜこんな広い道路が必要なのか多くの批判や不評にさらされた。一番の危機は1955年の市長選挙の時である。

「これまでの都市計画を見直す」をスローガンに立候補した渡辺忠雄が、百メートル道路の再検討を公約にして当選した。これまで推進してきた浜井信三市長のよもやの落選である。新市長は百メートル道路の幅員を半分にし、残り半分に公共住宅を建設すると公約していたが、実践することはなかった。



1955年頃の百メートル道路

4. 供木運動

渡辺市長が実施したのが「供木運動」である。その頃、百メートル道路もようやく道路の形態を整え始めたが、殺風景な状態である。広島市は1957年2月に緑化推進本部を設け、県下に12万本の樹木の提供を呼びかけた。

まだ被爆の記憶が鮮明に残る頃である。「広島を永遠の緑で覆われた平和郷に」という市の呼びかけに、県内各地から惜しみない協力が寄せられた。

1957年から58年にわたって展開された大規模な供木運動により、百メートル道路にも約6,000本の樹木が植えられ、その景観は一変する。

また、供木運動は様々に揺れた百メートル道路の利用論争に終止符を打ち、平和記念都市建設の理念を象徴する存在に変わる契機となった。その後も全国から、世界から多数の供木が寄せられた。



供木による植樹

5. 平和大通りの全通

整地が進んでも未舗装のため雑草が茂り、昼間でも人通りは少なかった。本格的な舗装工事は1957年から着手し、1958年から供木運動による植栽が始まる。

緑地帯には近場で原爆の犠牲になった組織・団体等の慰霊碑や石灯籠が建立される。また、エスキーテニス・コートが設けられたり、ベンチが置かれたり、市民の憩いやくつろぎの場となっていく。平和大通りが比治山から己斐まで全面開通するのは1965年5月であった。

緑が立派に生い茂り、高層ビルが立ち並ぶ今の光景は1990年代にできあがった。毎年、1月には全国都道府県対抗男子駅伝がスタートとゴール地点としてこの通りを走り抜け、5月にはフラワーフェスティバルで180万人近い人が集まり、11月からはひろしまドリミネーションで彩られる。

市民に親しまれている平和大通りだが、まだその潜在能力を十分に発揮しきれていないといえる。



1958年頃の平和大通り



現在の平和大通り

*「広島被爆40年史・都市の復興」等の文献を参考とする。

(瀧口信二)

○アイデアコンペの中から提案!

当面、2011年に行った広島市中央公園アイデアコンペの提案作品の中から市民の多くが良いとした案を紹介していく。

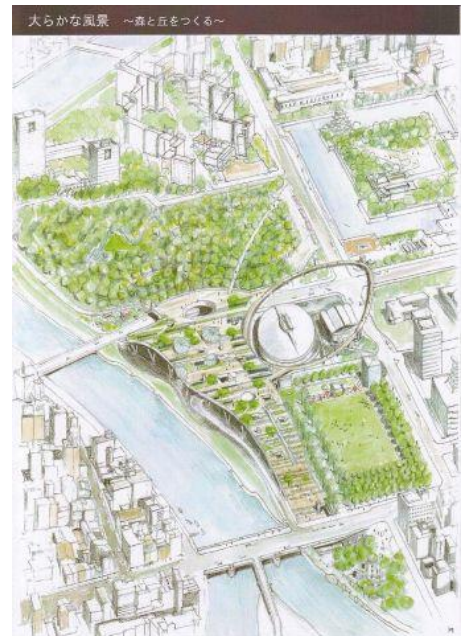
・審査員特別賞 作品番号23 (タイトル「大らかな風景～森と丘をつくる～」)

現実味のある理想的な提案で、示唆に富むアイデアが散りばめられている。

原爆ドームと平和公園を望める丘を造り、その下に商工会議所等を造り替え、丘から地下広場を経由して原爆ドーム側につなげる。

原爆ドームと平和公園を結ぶ軸線上にモール(緑道)を作り、地中の瞑想空間に結ぶ。旧市民球場跡地は市民が自由に使える自由広場とし、中央公園全体を市民が安全に安心して歩ける歩行者空間でつなぐ。また、公園の北側エリアは都心における世界市民の森を提案している。

この案をそのまま実現できれば、現状よりずいぶん改善されるのではないか。



受賞者: 高橋志保彦氏のコメント

文化遺産である丹下都市軸を尊重します。ヒートアイランド防止からも中央公園は森林浴のできる深い森とします。エリアの歩行者空間の連続性を重んじ、原爆ドームから中央公園に道路を横切らずアンダーパスを計画します。現状は思わしくありません。これは是非実現したいものです。慰霊碑から望むと原爆ドームの脇に高層ビルが見え景観阻害です。大きな丘を造り、下に既存施設を内包し、緑と太陽と風の眺望点と「祈りの丘」を形成します。移転した野球場の跡地は市民が集い、平等に、多様に使える緑の広場とします。

○紹介 まちづくり関連の団体とその動き

・ポップラ・ペアレンツ・クラブの紹介

2004年の台風18号で倒れた基町環境護岸のポプラの木の再生を応援する企業と市民グループと有志が、2006年7月にポップラ・ペアレンツ・クラブ（略称：PPC）を結成しました。PPCは基町ポップラ通り（基町環境護岸の愛称）の清掃、除草、雁木掃除などのお世話をする団体です。管理者、広島市と協定を結び、協力しながら、もっと楽しく、もっと魅力的な基町ポップラ通りを目指しています。



草刈り風景

（主な活動内容）

1. 毎月第4土曜日の午後、定例会を開催

シンボルツリーのポプラの周辺の草刈り（夏は朝から活動）と緑地清掃。誰でも参加できます。いっしょに心地よい汗を流しませんか。草刈り後のビールは旨いのだ！

2. 夏に野外上映会を開催

夏休みに家族で映画を見て、自然や命に思いを馳せてほしいと願い野外上映会を開催しています。

2007年に佐々部清監督の映画『夕風の街 桜の国』を皮切りに、『河童のクゥと夏休み』『小惑星探査機はやぶさの冒険』などを上映し、この夏は6回目。50人のボランティア・スタッフがスクリーンやテントを立て、杭を打って会場をリボンで仕切り、キャンドルを灯して、周辺警備もします。すべてがボランティアによる手作りです。

今年は宮沢賢治没後80年に当たり、賢治さんの作品『セロ弾きのゴーシュ』のアニメーション映画を鑑賞しました。上映前には、切り絵作家で花巻出身の吉田路子さんの語りによる「双子の星」のお話を聞き、参加者とともに東北へ思いを寄せました。



野外上映会
（ポップラ劇場 2013）

▼ホームページ：<http://poplaparentsclub.web.fc2.com/>

○みんなが気持ちよく利用するために

この河岸緑地はポップラ（ポプラの木のこと）を応援する人たちばかりではありません。ニセアカシア・ファンはその下に花を植え、水やりなど毎日、手入れをして、花壇を設けることで「ゴミの後始末」を呼び掛けています。

結成以来かれこれ6年になりますが、活動を通して「草の高さに合わせてゴミが捨てられる」「除草後はポイ捨てタバコが目立つ」「きれいな場所を人は求める」というように、公共マナーについて感じる人が多いです。

この水辺は野鳥が訪れ、自然を満喫できる一方、水飲み場も駐車場もありません。便利な場所ではないけれど、人が集まり、川を見て1日過ごし、夕日を眺めながら犬と散歩します。バーベキューのグループは、テントを張りピクニックを楽しみ、残念ですが、炭の破片を置いていってしまいます。その炭をペット犬が食べてお腹をこわします。

公共空間は誰のものでもない、みんなのもの。皆で楽しく使って、皆で気持ちよく掃除して、元の状態に返すことを心がけたいと思います。

（ポップラ・ペアレンツ・クラブ 隆杉純子）

□ほっとコーナー

『180円切符を片手に居酒屋探訪』

前岡智之

日々、医者への指示に従って生活している(出来る限りである)のだが、2～3日に1回、居酒屋に向かう。カウンターの片隅で2合ばかりの酒と2～3品をゆっくりやる。嗜好の時となる。何よりも楽しみにしているのが、板さんや女将さんと会話を楽しみながらお客の様子を観察すること。したがって狙い目は、定員10名ほどの歴史のある店であり、どこの街にも1～2軒はあるのだ。

そこで、たまに夕方から時間がとれると、面白い企画を実行する。可部線安芸長束駅から180円切符を片手に居酒屋探訪。北は緑井・八木の梅林まで西は西広島(己斐)まで、東は向洋。南は、横川を経由して十日市・土橋(290円かかる)までである。それぞれの町に着いてぶらぶらしながら居酒屋を探す。

一例として先日の居酒屋を紹介しよう。

小網町の〇〇〇、洒落た暖簾に惹かれてお邪魔した。おしろい気なしの中年美人が二人、L型のカウンター、お客は一人、絶好だ。とりあえず小生(こなま)を注文し、つまみを。カウンター台の上には、小鉢が三つ。茄子のあげ出し、塩鯖の焼き物、それと——つぶ貝だ！早速、つぶ貝をお願いし、お品書きにある焼き玉葱とせせり焼きを注文する。そして、酒。いつもは、亀齢の純米をいただくのだが今日は、八海山の純米から。もちろん緩爛で。お客は、常連のようだ。

私“素敵なお店ですね”

お客“二人が大酒飲みでね。気をつけなさいよ”

私“えええっ！それは楽しみですね。どの程度いけるのですか”

女将いわく“ほんの少々よねえ” “酔わない程度よねえ”

お客“昨日下ろした一升瓶、まだ残ってる？”

女将“もう一杯ぐらいいはあるよ。でも新しいのがあるから”



こんな会話を聞きながら、ちびちびやるのが私。

酒は、ひとりで飲むのがよろしい。ひとりで飲んでいると、同じようにひとりで飲んでいる客と目が会って、そこから会話が始まることも多い。店の人もひとり客には気軽に声をかけてくれる。何気ない話からその土地の歴史や文化、人柄みたいなものが伝わってきて楽しいものだ。そして、自分自身もはっきり見えてくる。

□あとがき

オリンピックの東京開催が決まる。2020年まで元気に過ごして、この目でオリンピックを見たいという願望が一つ増えた。暗闇を彷徨っているときほど、一点の光明がありがたく思える。日本も7年後を目指して活気を取り戻すことができるだろう。

広島のみならずにも光明がないものか。関西圏と九州圏の狭間で埋没気味と言われて久しい。被爆100年を目指して、国際平和を祝福するようなアドバルーンを打ち上げたいものだ。

(瀧口信二)

読者の皆さん、菓子博後の跡地利用について投稿をお待ちしています！

その他に自由な提案・意見をお寄せ下さい。次号に掲載させていただきます。